メアリン隊じゃないから

横濱遊郭編　　**by うさお**

タツオトさんが次回から聴覚について論ずるというので、うさおも今のうちに数少ない音響ネタを披露しておこうと思い立った所以だ。音響技術者を目指す女学生さんに音響工学一般を教えていた時のこと、常日頃から独特の雰囲気を持つ彼女に神秘性を感じていたうさおは、彼女から「先生、教えていただきたいことが･･･」と質問されたときにくらっと来ましたね。

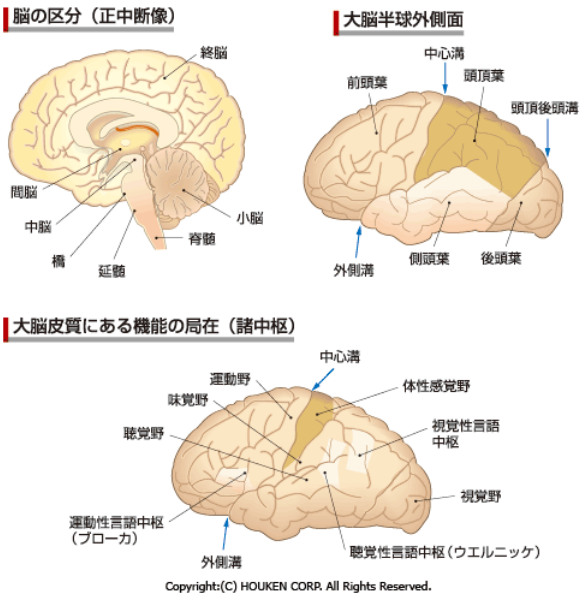
若い女性の醸し出す独特の魅力にくらくらしながら、それでも師匠らしく「なにが～？」と。「何かな？」も無いものであるが、まあ、ここではさておき、聞いて見るとこんな話だった。

「自分の祖母は三味線の師匠をしていた。その所為か祖母は良く歌舞伎に連れて行ってくれた。物心付いた時から、三味線の音を聞くと赤い色が見える。先生、これっておかしいことですか？」

彼女のその精神構造に心惹かれるものがあり、さて如何答えるべきかを考えてしまいました。これは共感覚を呼ぶ一種の錯視なのだが、精神に異常をきたしている訳ではないらしい、が、正常でもないでもないらしいのだが、普通に生活していく分には何ら影響が無いらしい。うさおが気になったのは、赤の色が見えると言うことなのだ。

ここで、共感覚と言うものを少し説明しておきましょう。

「共感覚者の驚くべき日常―形を味わう人、色を聴く人」リチャード・E. シトーウィック著の本に詳しいのですが、2万5千人に一人の割合で特殊な感覚を持った人がいます。この感覚は生活には何の支障もなく暮らすことが出来ます。この人たちは、例えば食物を味わうと指に触感が生じるとか、音を聴くと色が見えてしまうと言うことが生じます。この音は赤い。共感覚者の場合、これは比喩ではなく、実際にそう感じています。



五感のうち、どの感覚とどの感覚が結びついて感じるかは人によって異なるそうです。そのなかでも視覚と聴覚の結びつきが最も多いらしい。著者はこの現象は脳内の配線が混乱して生じる異常な現象と考えていたそうですが、研究を進めるに従って共感覚は人間（哺乳類）の誰でも持っている根本的な感覚で脳の正常な機能ですが、その働きが意識に現れ

る人はほんの一握りでほとんどの人は現れないまま生涯を終えるのだとか。

共感覚は、脳の皮質の下にある海馬を中心に、いつでも起る神経プロセスだが辺縁系の正常な処理を通過すると一般的な人は意識から失われてしまう。ヒトの進化の過程でそういう仕組みになったのだが、どうも「認知の化石」とも言える原始的意識らしい。

共感覚の中でも、音楽や音を聞いて色を感じる知覚は「色聴」といわれます。絶対音感を持つ人の中には、色聴の人がいる割合が高いそうである。また、同じ共感覚者同士でも同じ音を聞いたら同じ色が見えるかと言うと、そうでもないらしい。

で、先ほどの話だが、彼女は三味線の色を赤と答えた。更に言うなら歌舞伎の舞台全体も赤に染まっていくのだとか。これは共感覚を持っていることとは別の、彼女の原体験に由来する精神的トラウマにではないのかと。

何故赤なのか、弦の音は何故赤なのか、赤と言う響きに「血」を連想してしまうのは、うさおだけの性なのか。う～、何だか心理サスペンスのようだね。

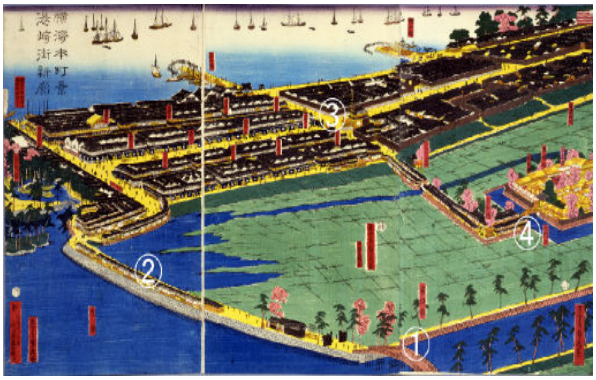
彼女が幼い時に祖母を訪れる男性が居た。もちろん、祖母の連れ合いではない。不倫の関係だ。やがてこのことが本妻に知られることに。乗り込んでくる本妻、もみ合ううちに三味線の撥が、本妻の喉に。辺りは血の海。佇む彼女。放心した祖母は無心に血だまりの中で三味線を弾きだす。

てな話を考えていると、件の女学生は不気味なものを見たような顔をして、「失礼します！」と帰ってしまった。

前振りに使いましたこれらの図は、本文の内容とはまったく関係がありません。単なるイメージです。

梶芽衣子さんは「修羅雪姫」を演じているときには、とても尖がっていて素敵でした。余談ですがこの映画の監督は藤田敏八です。

さて、本題の横濱にあったと言う遊郭の跡地の探訪です。



右上の絵は五雲亭貞秀が描くところの「横浜本町景港崎街新郭」の図です。上の方が開港された横浜港で象の鼻などの埠頭が見えます。埋め立てられた居留区です。図中の④の地区が幕府が造ることを指示した遊郭です。周りがまだ埋め立て途中の海であることが判ります。江戸の吉原もそうですが遊郭の周りの堀は遊女が逃亡するのを防ぐために造ったと言いますが、客が無銭逃亡するのを防ぐためだったとも言われています。

下の絵は角度を変えて描かれたものです。大変隆盛を極めていることがわかります。この場所は今の横浜公園、横浜スタジアムのところに当たり

神奈川横浜新湊港崎町遊廓花盛之圖眞景　万延元年(1860年)
五雲亭貞秀

ます。春は桜並木が続き江戸の吉原を彷彿とさせます。

上の地図と見比べてみると位置関係が良く判ります。さて、この遊郭は幕府が港を開くときの町づくりの一環として造りました。太田屋新田の一角にあった港崎町（みおざきちょうと読みます）に、品川遊郭の岩槻屋の主人佐吉が遊里埋立の工事を担当しました。佐吉はそのまま港崎町名主となっています。この遊郭は約1万5千坪もあり大門や会所のある造りで、江戸の吉原を髣髴とさせるものでした。左上図：万延元年（1860年）6月　五雲亭貞秀　横浜大湊細見之図です。

最隆盛に時には、遊女1400人、揚屋100軒と途方も無い数字が挙げられていますが、真偽のほどは判りません。

一説には、遊女屋15軒、遊女300人、

現在の横浜スタジアム

局見世44軒、案内茶屋27軒などがあったとされています。中でも岩槻出身の佐吉が経営する岩亀楼（がんきろう）は、豪華で際立って、横浜名物の一つだったそうです。幕府は外国人を横浜に引きつけるために、羅紗綿という外国人専用の娼妓を置きました。その最も大きなものが岩亀楼だったのです。

岩亀楼は中が二つに分かれていて、日本人廓と外人廓に分かれており、互いに行き来は出来なかったようです。この岩亀楼では亀遊という女郎の逸話が有名です。当時の外国人は遊女を落籍せて妾にすることが流行りました。亀遊は羅紗綿ではなく、日本人相手の花魁でした。飛びぬけて器量の良かった亀遊はたちまち市井の人気者になります。評判を聞きつけて外国人に妾になれと金でもって強要された亀遊は、「露をだに いとふ倭の 女郎花 ふるあめりかに 袖はぬらさじ」と辞世を残して自害したと言うものです。有吉佐和子さんの小説で有名です。

万延元年(1860年)　横浜岩亀見込之図　二代広重　喜斎立祥

横浜スタジアムに残る岩亀楼の石灯籠です。

この遊郭は1867年（慶応2年）11月の豚屋（豚肉を食べさせるお店を当時は豚屋さんと言いました。）火事で焼失し、遊女400人が犠牲になったとも言われています。上記の石灯籠はその供養のた

万延元年(1860年)　横浜港崎廓岩亀楼異人遊興座敷之図
一寿斎芳員（歌川芳員・一川芳員）

めか、妙音寺に寄進されたものを横浜市が譲り受けたもの。この遊郭跡地は外国人の要望で公園として生まれ変わります。このほかにも絵図として残っているのは、五十鈴楼などがあります。

五十鈴楼　万延元年(1860年)　　五雲亭貞秀画　糸庄版

曙町～羽衣町

慶応2年12月に吉田新田北一ツ目(今の羽衣町、蓬莱町の付近：伊勢佐木町の入口辺り)を吉原町と改称して吉原遊郭としましたが、これもたった3年の短い期間で1871年に火災で焼失しました。やはり夜の遊びと言うことで、蝋燭やガス燈、料理の火の不始末などが原因なのでしょうか。曙町から羽衣町の裏手はなにやら怪しげなピンサロ風のお店が多く、食事をしていたお店から出ると妙に素足を出してナイトガウン(古い！)のお姉さんが歩いていた。黒服のお兄さんがご苦労様ですと頭を下げていたが、変な迫力があったなあ。写真は無理だったぞ。

曙町　厳島神社

遊郭の近所には神社さんがあるのが不思議だ。これは厳島神社だ。翌 1872 年に高島町に移転して高島町遊郭を興しますが、やはり焼失してしまいます。高島町は横浜駅の２番目の移転地であり、港湾やドックのある地域です。現在では日産の本社がある所と言うほうが分かりが良いかも知れません。東横線の高島町駅があったのもここです。人通りも少なく、商業や工業が盛んな訳ではありません。近くに「アンパンマンミ

高島町付近

ュージアム」や「文身歴史資料館」がありちょいと微妙なところです。

帷子川に囲まれるように存在高島町界隈は、みなとみらい地区の充実と共に高層ビルが立ち並び昔の臭いが少なくなって来ている処です。住宅が少ないので夜になると本当に人通りが少ないですよ。

しかしながら、ほんの一角にはこのような昔が残っている場所もあります。大潮の時には、いつも帷子川が氾濫しこの辺りも足元まで海水浸りでした。

さて、横浜にある遊郭は８年以上継続して存在することが無いようです。ほとんどが焼失したり、関東大震災で壊滅したりとかで、とても悲劇的です。

地図で観ると高島町遊郭はこの辺り。

高嶋町風神楼

この絵から推察するに、鉄道駅の直ぐ近くにあったようで、汽車や馬や人力車で通ってきたのが良く判ります。馬は自家用車、人力車はタクシーと考えるずいぶん贅沢なお遊びをこの頃はしていたようです。

遊郭に遊びに行くってのは気恥ずかしいことではなかったのかな。それとも通い慣れてしまうと、だんだん見栄を張るようになってくるのかなあ。

その高島町遊郭も焼失した後、明治13年に吉田新田南三ツ目(今の永楽町、真金町)へ移転しました。永真遊郭と称したようです。落語家の桂歌丸はこの遊郭で育ったこと有名です。氏の祖母タネは「富士楼」のおかみで、10人の娼妓を抱えており「張見世」をもつ大店で、張見世に娼妓が並んでおり客は気に入った妓に声を掛けました。「富士楼」と「ローマ」、「イロハ」の妓楼の女主人は、「真金町の三大ばばあ」と呼ばれ恐れられていたそうです。この当時の遊郭の写真、絵は余り出回っていないので当時を窺い知ることは出来ません。

真金町富士楼

桂歌丸師匠

この広い道路が昔の堀の跡だと言われています。しかし、大正12年の関東大震災で多くの死者を出したことで一時の隆盛は無くなったようです。戦後は赤線地区として存在し、昭和33年の売防法施行後はそこに永真遊郭があったことすら判らない街となっています。とは言えこの辺りは、未だにソープランドやファッションホテルが並ぶ表通りと、高層住宅が並ぶ内側の街、しもた屋が並ぶ住宅街とが混在する町で、どこぞに黒塗りの大型車に黒尽くめの服装の「お兄いさん」が屯してそうな町でもあります。

如何にもそれらしいお屋敷

だって昔は、売春と麻薬と暴力が売りのような地域でしたもの。

うさおが小学生の時にお酉様に連れられて、真金町の大鷲神社に行ったことは、何かの章で書いたような気がします。昔の妓楼の名残を残しているのではと思われる建物がありました。単に「そり」、「むくり」が好きな和風マニアのお家かもしれませんが…。

吉原の遊郭も大鷲神社さんで、永真遊郭も大鷲神社さん。本当に遊郭と神社は何か因縁があるようだ。

永真赤線地帯
左上：初店　右上：化粧中
下：張り見世風

今でもお酉様の時には旧遊郭を取り巻く道路に、多くの屋台が繰り出し大賑わいを見せるのだとか。横浜通り商店街に通じる横丁にあるとある喫茶店に入ることにしました。

カフェ･マツモトの主人談

お酉様の縁日は丁度四角形の通り(元の遊郭の堀外の道路)で行われ、大通り公園脇の道路も使われているんだよ。

お酉様のときはこのカフェは香具師の幹部達のたまり場になるよ。そういった縁日の仕切りはもう 60 年もやっているかな。

香具師の幹部達は大通り公園のところに茶屋と言うか、お酒や食べさせるところを牛耳っており、一日で 300 万円も稼ぐそうだ。

お酉さまの人手は 16 万人くらい出るそうで屋台も 500 位出るのだが、最近の世知辛い世相を反映してか、縁起ものの熊手を買っていく人が少ないらしい。客はこの熊手を値切って買うのだが、値切った分は売り手にご祝儀としてあげるのが慣わしなんだが、最近の若い人は値切ったまんま、ご祝儀もなく帰ってしまうそうだ。

困ったもんだねえ、若い人は焼き蕎麦を５人でひとつを買って、割り箸を５個要求するそうだ。割り箸は１円、２円の元値だから、まあサービスと思って断らないが、嫌になるなあと話していたそうです。

横浜通り商店街はこの辺りでは一番活気のある商店街だが、それでも最近は景気が悪くて青息吐息だそうな。

この喫茶店はマイク・ハマの撮影現場になったことで、芸能人も多く来た事があるそうだ。未だにファンだという人たちが来て、ミルク珈琲を飲んでいくそうで、うさおもミルク珈琲を頼みました。とても、昔の赤線があった時にお姉さんたちが遊びに来たか聞きたかったが、なんだかとても聞くような雰囲気じゃなかったなあ。

※常盤とよ子の「煌きの瞬間」写真集に、永真遊郭跡地の赤線時代の写真が残っています。

如何にもそれらしいお家

横浜橋商店街の中には、岩亀の看板が･･･鶴見にも「岩亀」さんがあったけど、ふぐ屋さんだったな。

この商店街は80周年のアニバーサリィーらしく、桂歌丸さんの似顔絵の幟が掲げておりました。とても下町風の商店街ではあります。

岩亀稲荷と岩亀横丁の由来

嘉永六年（八五三年）ペリー提督率いる黒船四隻が浦賀沖に来航。徳川幕府はパニックに陥り、接夷か開国か二者択一を迫られた。ときの大老、井伊掃部頭直弼は勅許を得ずして日米修好通商条約に調印（安政五年一八五九年）し、横浜は翌、安政六年（八六〇年）で開港した。開港当時の横浜の歓楽街は港崎町（横浜スタジアム辺りで隣接する吉原遊園に岩亀楼と刻まれた石灯籠が保存されている）から高島町に移り二を争う大楼岩亀楼があった。三層構式の楼閣が偉大さを誇り、夜毎に美く人々の話題となった。当主は仮名で、埼玉県岩槻の人で、その音読みで「がんき」と呼ばれていた。この岩亀楼一番の売れっ子喜遊亀遊説もある大夫がペリー艦隊の軍人「言奇られ」がこれを拒み、露をだにという倭の女郎花」なるあやかに袖はぬらさじと月の出を待ち自害した。この切り幕末の遊女気質が十分伺える。遊女達が病に倒れた時、静養する際、岩亀横丁にあり信仰してたお稲荷様が岩亀楼の奥内に祀られ岩亀稲荷と呼ばれ現在も信仰が受け継がれている。このお稲荷様を粗末にすると必ず近所の婦人に災がおこると言い伝えられ毎年五月二十日には盛大に例祭が営まれている。

〒220-0042 トへ
岩亀稲荷講
横浜市西区戸部町4-152
TEL 045(231)2322

岩亀稲荷と岩亀横丁の由来

岩亀稲荷というのが、関内から高島町に向かう途中の雪見橋に「岩亀横町」と呼ばれる処にあります。気をつけて探さないと見落としそうな家と家の狭間にひっそりとあるんですが、まあ旗が立っているんで何となく判るんですがね。

近くには岩亀と名のつく料亭、ホテル、サウナとがありますよ。